岐阜がつながる 中山道ぎふ17宿 歩き旅

鵜沼宿（うぬま）～太田宿（おおた） 約7.9km

中山道ぎふ17宿とは?

江戸時代に整備された五街道の一つである中山道は、江戸と京都を結ぶ重要な街道で、全長135里32丁（約534km）に69の宿場が置かれました。そのうちの17宿、126.5kmが岐阜県の美濃地方を東西に横断しており、今も往時の面影を色濃く残しています。その土地の歴史や文化、隠れた魅力の発見を楽しむ街道観光は岐阜県の誇るべき観光資源であるとして、平成25年2月に「岐阜の宝もの」に認定されました。

鵜沼宿

江戸から数えて52番目の宿場となる鵜沼は、当時は、「宇留間」あるいは「売間」と書かれていたようです。江戸時代には他の宿と同様に中央に用水が流れていたのですが、今はそれはなく、代わりに家の軒下に用水が涼しげに流れています。近年、脇本陣を復元するなど家並みが整備され、昔の街道の趣を醸し出しています。

鵜沼宿町屋館

かつて旅籠であった「絹屋」を中心に、歴史民俗資料館と離れからなる交流施設です。明治時代の濃尾大震災の後に建て替えられたものですが、江戸時代の面影を残す町屋として各務原市指定文化財となっています。

うとう峠

鵜沼宿の西の難所は「かかみ野」で、宿を出発し、西に向かうと、およそ三里（12km）に渡ってかかみ野が広がっていました。そこにはほとんど人家が無かったようで、山賊などが行き来する人々を狙っていたため、旅人にとっては恐ろしく寂しい難所だったようです。「うとう坂」と呼ばれたこの峠道も難所で、御嶽宿から細久手宿に向かう途中の「謡坂」と同じ名前ですが、こちらの「うとう」は謡うではなく「疎う」。きっと疎ましいほどの場所であったのでしょう。

Topics 日本ラインとロマンチック街道

この辺りの木曽川の風景がヨーロッパのライン川に似ているとして、地理学者・志賀重昂（しがしげたか）によって名づけられました。飛騨木曽川国定公園にも指定されているこの地は、長い年月をかけて、水や風が少しずつ削り取ってできた奇岩・怪岩が数多く点在します。木曽川の景色を眺めながら歩ける全長4kmの日本ラインロマンチック街道は、絶好のお散歩コースです。

脇本陣林家住宅

太田宿の往時の賑わいを想像させる立派な脇本陣。東西25間の広い間口に土蔵10棟、馬屋3棟、離れ座敷もある壮大な造りで、初代当主の林市左衛門は、太田村の庄屋、尾張藩勘定所の御用達、質屋、味噌醤油の販売などを手掛けていました。昭和46年（1971）、国の重要文化財に指定され、一部は無料観覧できます。

太田宿

江戸日本橋から数えて51番目の宿。当初は大久保長安が奉行として治め、長安没後は尾張藩が支配しました。中山道三大難所のひとつ「太田の渡し」があった太田宿は、天保14年（1843）の記録によると、東から上町、中町、下町に分かれ、宿の長さは6町14間（約680m）。問屋場が2つ、本陣・脇本陣が1軒ずつ配置され、旅籠は20軒、戸数118軒で、人口505人が住んでいました。今なお当時の面影を残した脇本陣が現存するなど、中山道の住時の雰囲気が味わえます。